

資料

第17回世界陸上競技選手権大会（カタール・ドーハ）視察報告

——男子マラソンに着目して——

尾 方 剛*

1. はじめに

2019年9月27日から10月6日までの10日間、カタールの首都ドーハで開催された第17回世界陸上競技選手権大会の視察に赴いた。男子マラソンは10月5日に行われるため、10月2日に羽田空港から深夜便で移動し、その日の早朝にハマド国際空港（Hamad International Airport）へ到着した。

ホテルへ荷物を置き、現地時間の9時頃（日本との時差は-6時間）早速AD（アクレディテーションカード）発行のためメインアクレディテーションセンター（MAC）へ移動した。ADを受け取り、各国メディアが放映している国際放送センター（IBC）内のTBSテレビ（TBS）ブースへ到着した。アナウンサー、ディレクターの方々との打ち合わせ後、2006年アジア大会、2011年AFCアジアカップ決勝戦の会場として使用されたKhalifa International Stadium（ハリファ国際スタジアム）へ解説者、アナウンサーの方々と移動した（写真1）。この競技場はアスパイヤ・ゾーンという総合運動公園の中に位置しており、アスパイヤ・タワーを始め、アスパイヤ・ドーム水泳センター、アスパイヤアカデミーなど施設が多数見受けられた。大会期間中は日中の気温が40度以上となる日もあり、夜はうだるような蒸し暑さを体感した。あまりにも過酷な状況のため、競技場グラウンド内の通気口から冷房を効かせており、グラウンド内

の気温は約20度と衣類を羽織らないと肌寒く感じた。外気温とは20度以上の差があるため、選手はコンディション維持に相当神経を使わなければならない条件下だと推測された。

ロード種目のマラソンコースは、ドーハの高層ビル群の夜景が観賞可能な観光スポットの1つであるドーハ湾沿いの海岸通り Corniche（コーニッシュ）と呼ばれる海岸通りに設けられた1周7kmの周回コースが舞台となった（写真2）。競技場の視察後、男子マラソンの解説を行うためマラソンコースの下見を実施したが、平坦なコースで同じ箇所を何度も走らなければならないため、暑さや湿度など様々な条件を鑑みて9月27日に行われた女子マラソン（23時59分スタート時の気温32.7度、湿度73.3%）同様、肉体的、精神的にも非常に過酷なサバイバルレースとなることが予測された。



写真1 世界陸上競技選手権大会が開催されたハリファ国際スタジアム（筆者撮影）

* 広島経済大学経営学部スポーツ経営学科准教授



写真2 世界陸上競技選手権大会が開催されたロード種目の会場（筆者撮影）

2. 男子マラソン記者会見

レース2日前の10月3日9時からアシックスラウンジにて男子マラソンの記者会見へ出席するため7時30分に宿泊先ホテルを出発し、各選手、選手の所属先コーチへ取材を行った。深夜のレースということで夜にメイン練習を行い、午前就寝するといった夜昼逆転する生活に変えたと話していたが成果を上げられるのかと疑問を抱いた。

17時頃に競技場へ移動し、22時から男子1500 m 予選、23時から女子1500 m 準決勝を観戦した。競技場外は深夜でもかなり蒸し暑く感じられた。

3. 男子マラソン

男子マラソンは10月5日の23時59分スタートのため、20時30分頃からロード種目会場にてスタンバイし、山岸宏貴（GMO アスリーツ）、川内優輝（あいおいニッセイ同和損害保険）、二岡康平（中電工）3選手とコーチへ話を聞き、選手がウォーミングアップを行っている姿を視察して解説するための材料となる情報収集を行った。23時頃からスタート地点付近に設置された中継車でマイクチェック、リハーサルを行い、23時15分頃から解説を行った。前日行わ

れた男子20 km 競歩（10月4日23時29分スタート時の気温32度、湿度77%）とは違い、さほど蒸し暑さは感じられず、今大会の中では比較的穏やかなコンディション下でのレースとなった（スタート時の気温29度、湿度49%）。レースはアル・コルニーシュストリート（北と南を折り返し、反時計回りで1周7 km のコースを6周するコースで行われた。スタート直後からデルリス・ラモン・アジャラ（パラグアイ）が飛び出し、後続を大きく引き離す展開で推移し、日本勢はアジャラを追いかける2位集団につけレース序盤を展開した。5 km 通過は先頭のアジャラが夏のマラソンとしては早いペースとなる15分06秒で通過し、日本勢3選手は2位集団での走りとなり、アジャラとの差が1分ほどに広がっていた。10 km 通過はトップを快走するアジャラが30分40秒で通過し、35人ほどになった2位集団が1分差でアジャラを追っていたが、日本勢3選手は2位集団から離れた位置で走っていた。中間点は先頭のゼルセナイ・タデッセ（エリトリア）が1時間05分56秒で通過し、レリサ・デシサ（エチオピア）、前回大会優勝のジェフリー・キルイ（ケニア）ら5選手が追いかけていたが、日本勢3選手は先頭から1分以上離されていた。25 km 以降は予想通りエチオピアとケニア勢のトップ争いとなり、最後まで目が離せない展開となったが、デシサが2時間10分40秒でゴールテープを切り、モジネット・ゲレメウ（エチオピア）が2時間10分44秒で続き、エチオピア勢がワンツーフイニッシュとなった。

前回大会4位のカルム・ホーキンス（英国）が40 km 付近で4位と順位を上げ、先頭集団に追いつく健闘の走りそのまま4位でゴールしていた。日本勢は山岸が2時間16分43秒の25位、川内が2時間17分59秒の29位、二岡が2時間19分23秒の37位でゴールし、日本勢は3大会連続で入賞を逃した（表1）。

表1 第17回世界選手権ドーハ大会 男子マラソン成績

順位	選手名	国	タイム
1	Lelisa DESISA	エチオピア	2:10:40
2	Mosinet GEREMEW	エチオピア	2:10:44
3	Amos KIPRUTO	ケニア	2:10:51
4	Callum HAWKINS	英国	2:10:57
5	Stephen MOKOKA	南アフリカ	2:11:09
6	Zersenay TADESE	エリトリア	2:11:29
7	El Hassan EL ABBASSI	バーレーン	2:11:44
8	Hamza SAHLI	モロッコ	2:11:49
25	山岸 宏貴	日本	2:16:43
29	川内 優輝	日本	2:17:59
37	二岡 康平	日本	2:19:23

出所：月刊陸上競技（2019）「月刊陸上競技11月号」、
講談社、p 117より筆者が作成

2019年9月15日に東京都渋谷区の明治神宮外苑いちょう並木をスタート・フィニッシュとし、この発着点以外は東京五輪本番と同様のコース（その後、札幌市にコース変更することが2019年11月1日、国際オリンピック委員会により正式決定となった）で2020年東京五輪マラソン代表選考レース「マラソングランドチャンピオンシップ」（MGC）が開催された。世界選手権に出場した3名は2020年東京五輪マラソン代表選考レースではなく、日本代表として国際大会での経験を得られる世界選手権出場を選択した。山岸、二岡に関しては初の国際大会や深夜の特殊な条件下でのレースということもあり、海外選手との経験値、走力差を露呈した結果となった。今後、様々な国内外でのレースで実績を上げ、自身でレースを組み立て、レースを支配する力が備われば国際大会においても安定した成果を上げることが実現できるであろう。12 km 付近から第2集団からも離れた川内は経験豊富な選手ではあるが、暑さに対して克服することが苦手な体質であり、暑い気候の国際大会にて本来自身が常備しているパフォーマンスを

発揮することは困難だと考える。

2時30分に中継が終了し、ハマド国際空港（Hamad International Airport）へ移動して6時45分の便で岐路に就いた。慌ただしくて途轍もなく疲労感が押し寄せてくる感覚があった。

4. 総 括

今大会の世界選手権での日本のメダル獲得数は、金2、銅1と2017年に開催された前回のロンドン大会にて獲得した銀1、銅2を上回る成果であった（表2）。

日本人選手では、男子50 km 競歩で鈴木雄介選手が金メダル、男子20 km 競歩でも山西利和選手が金メダルを獲得し、共に東京五輪2020大会への代表出場が内定した。

男子の4×100メートルリレー（1走・多田修平、2走・白石黄良々、3走・桐生祥秀、4走・サニブラウン・ハキーム選手）で、日本はアジア・日本新記録で銅メダルを獲得し、東京五輪へ期待を高めた。

また、女子マラソンでは谷本観月選手が7位入賞した。女子20 km 競歩で、岡田久美子選

表2 世界選手権ドーハ大会 国・地域別メダル数

順位	国名	男子				女子				混成			男女			
		金	銀	銅	計	金	銀	銅	計	金	銀	銅	金	銀	銅	計
1	米国	9	5	1	15	4	6	3	13	1			14	11	4	29
2	ケニア	2		3	5	3	2	1	6				5	2	4	11
3	ジャマイカ	1	2		3	2	2	4	8		1		3	5	4	12
4	中国					3	3	3	9				3	3	3	9
5	エチオピア	2	4		6		1	1	2				2	5	1	8
6	英国		1		1	2	2		4				2	3		5
7	ドイツ	1		1	2	1		3	4				2		4	6
8	日本	2		1	3								2		1	3
9	ウガンダ	1			1	1			1				2			2
9	オランダ					2			2				2			2
11	ポーランド	1		3	4		2		2				1	2	3	6
12	スウェーデン	1	1	1	3								1	1	1	3
12	キューバ			1	1	1	1		2				1	1	1	3
12	バーレーン					1	1		2			1	1	1	1	3
15	バハマ	1			1		1						1	1		2
16	カタール	1		1	2								1		1	2
17	ノルウェー	1			1								1			1
17	グレナダ	1			1								1			1
17	ベネズエラ					1							1			1
17	豪州					1							1			1
21	エストニア		2		2									2		2
21	ウクライナ						2		2					2		2
23	カナダ		1	4	5									1	4	5
24	フランス		1	1	2									1	1	2
24	コロンビア		1		1			1	1					1	1	2
24	ベルギー			1	1		1		1					1	1	2
27	ボスニア・ヘルツェゴビナ		1		1									1		1
27	アルジェリア		1		1									1		1
27	ポルトガル		1		1									1		1
30	オーストリア			1	1			1	1						2	2
31	エクアドル			1	1										1	1
31	スペイン			1	1										1	1
31	モロッコ			1	1										1	1
31	ブルキナファソ			1	1										1	1
31	ニュージーランド			1	1										1	1
31	ハンガリー			1	1										1	1
31	コートジボワール							1	1						1	1
31	スイス							1	1						1	1
31	ナミビア							1	1						1	1
31	イタリア							1	1						1	1
31	ギリシャ							1	1						1	1
31	ナイジェリア							1	1						1	1
31	クロアチア							1	1						1	1
	ロシア（個人参加）		3	1	4	2			2				2	3	1	6

出所：月刊陸上競技（2019）「月刊陸上競技11月号」、講談社、p 114より筆者が作成

手が6位、藤井菜々子選手が7位のダブル入賞を遂げた。男子走り幅跳びでは、橋岡優輝選手が世界選手権で日本勢初となる8位入賞を果たした。

金メダルを獲得した種目は、男子20 km 競歩、50 km 競歩と男子競歩のみであった。女子のメダル獲得に関しては3大会連続メダルなしという結果となった。女子の場合、ロード種目のみ入賞という結果に終わり世界との力の差が鮮明となった。女子5000 mに出場した田中希実選手（豊田自動織機 TC）が予選（15分04秒66）、決勝（15分00秒01）と立て続けに自己新記録を更新し、東京五輪の参加標準記録（15

分10秒00）を突破した。決勝は14位であったが、積極的な走りで世界の強豪選手と決勝で戦えたことは今後に向けて成長していく指針を示せたのではないだろうか。

参 考 文 献

- BS-TBS, 「世界陸上2019 DOHA」. <https://bs.tbs.co.jp/seriku2019/> (2021/9/20アクセス)
- 月刊陸上競技 (2019) 「月刊陸上競技11月号」. 講談社, pp 88-89, 114, 117.
- 日本陸上競技連盟, 「第17回世界陸上競技選手権大会」. <https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1367/> (2021/9/25アクセス)
- 陸上競技マガジン (2019) 「陸上競技マガジン11月号」. ベースボールマガジン社, pp 4-31.